

要旨

東アフリカには、共通言語としてスワヒリ語が存在している。このスワヒリ語は、約 2000 年前から行われていたアラブ・ペルシア商人の東アフリカにおける交易により、アラビア語と東アフリカの言語であるバントゥ諸語が混合してできた言葉である。現在ではタンザニアの国語であり、教授用言語でもある。一方、タンザニアには、約 130 におよぶ民族が存在する。スワヒリ語が拡大するまでは、各々の民族語が第一言語として使用されていた。しかし、これらの民族語の多くは正書法が確立されていない。正書法が確立されていない民族語は無文字の状態であり、各民族は、口頭伝承・口頭文芸を媒介して社会の規律を守ってきた。現在では、多くの民族語の使用は、減少している状況である。

本稿では、ボンデイに伝わることわざを題材とした物語から、ボンデイの社会の様子を読み取った。すると、ことわざから発展した物語により、ボンデイの道徳を誰にでも理解ができよう伝えようとしていることが確認できた。

I はじめに

東アフリカのタンザニアでは、ことわざを使用するのは「知識人」と言われている。タンザニアには約 130 の言語と民族が存在する。しかし、スワヒリ語が国語となって以降、民族語のことわざは注目されていない。タンザニアの都市で聞き取り調査をした際、北東部の人びとがタンザニア国内でも特に頻繁にことわざを使用することが確認できた。本論では、タンザニア北東部に位置するタンガ州のムクジ村に居住するボンデイの人びとのことわざに焦点をあてる。

本論では、ことわざがどのようにボンデイの生活に結びついているのかを紹介する。ボンデイ社会は無文字社会であったため、ボンデイ語の正書法がいまだに確立していない。そのため、ボンデイ語のことわざは文字化されたものが残っていない。一方、ことわざは古くから伝承されている知恵であり、人々には興味がおおきいものでもある。ことわざを収集し、ボンデイ語の発音にしたがってアルファベットへ文字化していた長老に出会うことができた。また、脳裏に残っていることわざを筆者に教えてくれる人びとにも出会うことができた。筆者は長老たちとの出会いにより、合計 700 以上のボンデイのことわざを収集し、分析をした。

II タンザニア連合共和国の中のボンデイ社会

タンザニア連合共和国内におけるボンデイ社会の現在の状況をここで述べる。

1 タンザニア連合共和国

タンザニア連合共和国(United Republic of Tanzania)(スワヒリ語名: Jamhuri ya Muungano wa Tanzania) は、東アフリカでインド洋に面し、赤道よりほんの少し南に位置する。国土面積は、日本の約 2.5 倍であるが、人口は、約 58,000,000 人(2019 世界銀行)と、日本の約半数である。

タンザニアには、スワヒリ語でカビラ(*kabila*)と呼ばれる民族集団が約 130 存在する。カビラは、同じ言語を話し、同じ出身地の人々の集団である。各カビラはタンザニアの人々の帰属意識を担うものである。

タンザニアで使用される言語は、国語がスワヒリ語であり、英語が公用語である。スワヒリ語は、リンガフランカ(共通語)としてタンザニア全土のみならず、東アフリカのタンザニア全土、ケニア広範囲、ウガンダの一部、ブルンディの一部、コンゴ民主共和国の東部で使用されている(Whitely1956)。このスワヒリ語の広がりに対して、民族語(*Kilugha*)の使用は減少傾向にあり、さらに、近年では英語の重要性が広がりを見せ、英語が優勢言語になりつつある。タンザニアでは独自の文字が発達しなかったため、ペルシア・アラブ商人が到来した際には、文字はアラビックが採用されていた。その証拠に、メッセージが記載されているタンザニアの伝統的布カンガ(*khanga*)の古いものに記載されているメッセージはアラビア語で記載されている。世界大航海時代となり、ポルトガルがタンザニアを統治し、第一次世界大戦ではドイツが支配し、その後イギリスが管理したことで、アルファベットが採用されるようになった。

宗教に関しては、タンザニア全土でイスラームもしくはキリスト教の信仰者に分けることができる。1 世紀頃からアラブ・ペルシア商人たちが東アフリカ沿岸部に交易のため到来しており、アラブ語、ペルシア語と東アフリカの母語であるバントゥ語が混合してスワヒリ語が誕生し、同時にアフリカの文化とアラブ系の文化も混合し、スワヒリ文化が誕生した。イスラームの誕生は5世紀であるから、アラブ・ペルシア商人たちはイスラーム誕生前からアラブ・ペルシア商人が東アフリカに到来しており、イスラームが誕生してからは、アラブ・ペルシア商人たちは宗教のイスラームも東アフリカに広げていった。一方、キリスト教は 1800 年代から入ってきた。そのため現在のタンザニアの宗教は、ムスリムが半数、キリスト教徒が半数となっている地域が多くなっている。これらは外来宗教であるが、土着の信仰も存在しているので、外来宗教であるイスラームとキリスト教と共存しているといえる。

タンザニアの生業は、90%が農業である。主な生産物は、トウモロコシ、キャッサバ、豆類、米、ココナッツ、カシューナッツ、コーヒー、紅茶、サイザル麻、金などである。

2 ボンデイ社会の概要

私はタンザニアのなかでも、ボンデイという人々の生活を調査してきた。この人たちが主に居住する地域は、タンガ州ムヘザ県ムクジ郡ムクジ村というところである。標高は 250m、平均気温は 27.5°C、年間降雨量は 1,300mm で過ごしやすい環境であり、農作物にも最適である。主な生業は農業で、自家消費作物は、トウモロコシ、豆類、キャッサバ等がある。換金作物は、ココヤシ、オレンジ、カシューナッツとなっている。

ボンデイの居住地は、アラブ商人の交易ルート近辺で、アラブ人たちとの交流があった地域であ

る。アラブ人たちがプランテーションとしてココヤシ栽培を始めたため、ココヤシの栽培が今でも盛んである。以前はアラブ人たちがココヤシから石鹸をつくる工場を運営していたが、多くのアラブ人が東アフリカ沿岸部から退去したことで工場の経営が困難となり、ココヤシ加工産業は衰退してしまった。そのため、現在は、各家庭で女性が加工し、個人的に市場で販売をしている。

宗教は、もともとは土着信仰をもっていたが、イスラームがアラブ・ペルシア商人とともに入り、一時期はほとんどの人がムスリムとなった。しかし、1800年代にキリスト教であるアングリカン教会が建設され、伝道師も居住するようになってからは、イスラーム信仰からキリスト教信仰に改宗する人が多数出現した。よって、現在はイスラーム、キリスト教が半々となっている。土着信仰は、外来宗教により儀礼実践を禁止されているため衰退しつつある状態であるが、細々と継承されている。

ボンデイ社会が居住するタンガ州に住んでいる主な民族は、10民族以上である。ボンデイが居住するムヘザ県に住む主な民族は、5民族(ボンデイ族、サンバー族、ジグア族、セゲジュ族、ダイソ族)である。その中でも、ボンデイ族、サンバー族、ジグア族の言語は類似しており、各々がそれぞれの言語で話をしても、理解し合えると言われている。かつては一つの民族であったと伝承されている。ただし近年、スワヒリ語が国語となったため、小学校でボンデイ語を話した場合、学校から罰せられてしまう。学校教育の場だけでなく、宗教実践の場でもスワヒリ語が使用されている。外来宗教であるキリスト教の礼拝では、スワヒリ語が使用されているのである。イスラームにおいては、アラビア語を使用しているが、宗教実践以外のモスク内の会話はスワヒリ語となっている。生活に欠かせない仕事の場合は、他民族と会話をするため、共通語であるスワヒリ語を使用する。そして、病院、銀行、行政の場などの公共施設では多民族となるため、共通語のスワヒリ語を使用している。都市、街、農村、どこでも多くの人が集う場では、スワヒリ語を使用している。

このようにボンデイが居住する地域は、イスラームの影響が強く、かつ、キリスト教と土着宗教も混在し、生業の農業にもアラブの関与がある多民族共存社会である。スワヒリ語が優勢になり、これまで使用されてきたボンデイ語の使用が衰退している地域なのである。

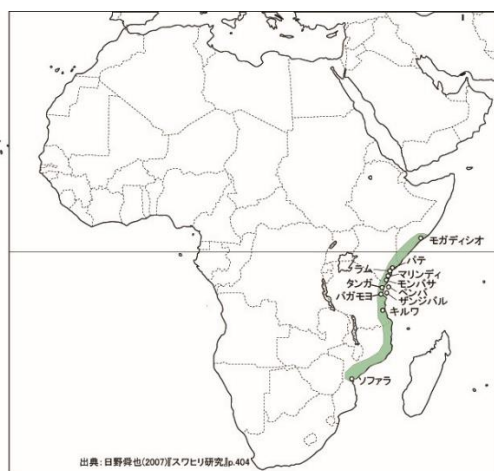


図1. スワヒリ地域 出典: 日野舜也 2007: 404



図2. スワヒリ語使用地域

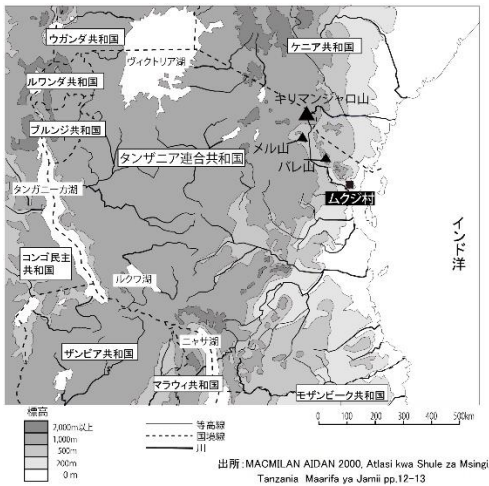


図3. ボンデイ族居住地域タンザニア連合共和国
タンガ州ムヘザ県ムクジ村

III ボンデイのことわざシモ (*Simo*)

東アフリカで広く使用されていることわざは、スワヒリ語でメサリ(*methali*)という。このメサリという用語はアラビア語源である。他方、サハラ南部のバントゥ諸語の一つであるボンデイ語ではことわざのことをシモ(*simo*)という。このシモの内容は、ボンデイに元来伝わってきた伝承であり、ボンデイの知的財産といえるだろう。

シモに関しては、ムクジ村の故ムゼー(長老)・チャンバイ氏(2022年1月3日死去、享年95歳)に伺った。ムゼー・チャンバイ氏は、自己アイデンティティであるボンデイ族を誇りに思い、言葉、唄に長けた人であった。ボンデイ語の使用が衰退していることに気づき、自ら様々な人からボンデイ語のことわざシモ 700 点を集めた人物である。

以下に、ことわざの内容の解釈の分析を試みた。但し、ことわざの意味は、使用されるとき文脈によって変化のある多様性をもっているため、ここでは意味を提供したボンデイ語話者の解釈に従うことにする。

1 ことわざの内容

集まった 700 強のことわざの分析を行い、表現方法と内容を明らかに使用と試みた。ことわざで使用されている題材は、衣類に関する語彙の服、コート、食に関する語彙の食す、肉、薪、ウガリ（乾燥トウモロコシの粉を熱湯で練って料理する東アフリカの主食）、住に関する語彙の小屋、ベッド、戸口、動物に関する語彙の鳥、犬、象、ガゼル（ウシ科の野生動物）、ネズミ、生業に関する語彙では、家畜に関しては鶏、牛、羊、ヤギ、農業に関してはトウモロコシ、苗植え、畑、鋤、狩猟に関しては罾、猟師、矢が使用されている。親族に関する内容では、兄弟、妻、母という語彙、人生や儀礼などの信仰に関しては死、出産、成長、結婚などや、信仰神、呪術師の語彙が使用されている。これらの語彙を見ると、ボンデイの生業、自然環境、食文化、信仰が題材となってシモがつくられていることがわかる(表1)。

これらの語彙を使用し、比喩表現(表2)が作られている。家族関係を比喩するために伝統医療師に使用する材料、孫、鍛冶屋と弟子、矢、家畜と牧童等の組み合わせで表現されている。親密関係を比喩するには、アボガドと畑の持ち主、ウズラと罾の仕掛け人、看護人と病人、バナナの実とバナナの木²、病人と看病人、きょうだいとその嘔吐、草原の鳥と猟師、背こぶという組み合わせで行っている。相互協力、助け合いに関しては、自分のものとあなたのもの、猿の顔、一つのプレスレット、雄一匹、歓喜の声、墓と貧乏人、大問題、ムセケ(鳥)と協力、暗闇で寝ている人、信仰、偉人、同士と口笛、2 人と道などの比喩が使用されている。これらの使用された語彙を見てみると、現地の文化や自然環境、工芸品など、ボンデイの生活の根底を支えているモノが対象にされていることがわかる。

ことわざ700強の内、120 の内容を解釈することができた。そこからボンデイ社会では、①助け合うこと、②家族を重んじること、③他人を軽視してはいけない、④怠け者になっていけない、⑤慎重であるべき、⑥悪態についてはならない、⑦目上・老人を尊重する、⑧仕事をしっかり行え、⑨自分の知恵や知識などを自慢してはいけない、⑩人に嫌がらせをしてはいけない、⑪結婚相手の見つけ方、⑫嘘についてはならない、⑬危険に近づかず回避しなさい、⑭モノを大切にしなさい、などを人々に伝承している(表3)。中でも、相互協力、家族関係に関しては多く確認することができた。

表1 使用題材

衣食住	衣:服、コート 食:食す、肉、薪、ウガリ、ココナッツ 住:屋、ベッド、戸口
動物	鳥、犬、象、ガゼル、ネズミ
生業	家畜:鶏、牛、羊、山羊 農業:トウモロコシ、苗植え、畑、鋤

	狩猟:罾、猟師、矢
親族	兄弟、妻、母
人生儀礼	死、出産、成長、結婚
信仰	神、呪術師

表 2 比喩表現

テーマ	比喩表現
家族関係 親密関係	伝統医療師に使用する材料、孫、鍛冶屋と弟子、矢、家畜と牧童、アボガドと畑の持ち主、ウズラと罾の仕掛け人、看護人と病人、バナナの実とバナナの木、病人と看病人、きょうだいとその嘔吐、草原の鳥と猟師
相互協力 助け合い	自分のものとあなたのもの、猿の顔、一つのブレスレット、雄一匹、歓喜の声、墓と貧乏人、大問題、ムセケ(鳥)と協力、暗闇で寝ている人 信仰、偉人、同士と口笛、2人と道

表 3 ことわざの主な内容

伝えている内容	
相互協力	老人への尊敬の念
家族関係	仕事、労働
他人への軽視	神、呪術師
苦難	結婚
怠け者	嘘
慎重さ	危機回避
嫌がらせ、虚偽	モノを大切にすること

2 ボンデイ語のことわざからの学び

ボンデイ社会では、さまざまなことわざが物語となり、分かりやすく「教え」を伝えている。ここに1つのことわざと、4つのことわざとその物語を紹介する。

(1) ことわざの紹介と解説

Kiwii kikawa chenu wada na wawii

手伝ってほしい仕事があれば、あなたは奉仕者といっしょに食べる。

意味:協力は皆にとってよりよいことだ。

場面:共同の仕事を共にするように、私たちは協調しあうことが大切だ。

<解説>

もともと農耕社会では、自分の畑を自分だけで耕すのではなく、地域ごとに分け、お互いの耕作を助け合いながら順番に耕していました。耕してもらった農地の所有者は、手伝ってくれた人々に、「食事」、「酒(ココヤシ酒)」、をふるまいます。日本では、もし家の修理をしてもらうために業者を呼んだ場合、料金を払いますが、茶菓子なども必ず出しますよね。タンザニアの場合、昔は料金なしでお互いを助け合っていました。ただし、近年は資本主義、市場経済が急激に入ったため、金銭のやりとりなしの相互扶助の実施はなくなりかけています。

「助け合い」という言葉の意味は、「相互依存」ではないのですか？と確認したところ、誰かに依存することはできない。あくまでも心ある人が助けるべきだ。と長老が答えていました。たとえ、客観的には依存しているように見えても、精神的には依存はしていない、という意識が高いのだと感じました。

(2) Bude (ni) mkuu wa safari(Bude mkuu ya ntambo)

ブデ(長老象)(は)旅の長

<物語>

ブデは、象の群れの中の大きな象です。猟師のキコソはキブブ森の象を狩りに行きました。一緒にカズヴィという勇敢な若者もいました。

カズヴィは森の中にいる象のキャラバンの順序を知りませんでした。ある時、彼らは、マニャンガニョの湖に向かう大きな象の群れに出くわしました。この象たちはゆっくりと進んでいました。その群れの前方に他の象より大きな象がいました。牙が大きく下に擦りながら、象は前かがみになり歩いていました。

カズヴィは驚きました。その老象より早く歩く象はおらず、その象は最初に水を飲みました。カズヴィは猟師たちに尋ねました。「どうして他の象たちは、あの老象を追いぬかさないのか。みんなあの速度)で満足しているのか」と、キコソは言いました。かれこそがブデで旅のリーダーだ。彼が先頭を切り、他の象は前にはいかない。全員、リーダーの手順に従っているのだ。

<解説>

アフリカの自然公園をテレビで見るとは可能である。ゾウの群れを見ると、大きな雄のゾウが群れを守っている光景を目にする。その大きな雄のゾウが常に群れを先導し、また後ろを見守っている。その状況が比喩されている。人間社会に置き換えた場合、国家社会、家族も、生活を送る過程の中で、リーダーの存在が必要となり、リーダーがいないと平和が危険にさらされるものであることを訴えている。

(3) Aflae njiani hakosi mzishi (Mfa siyai nkakosa mzisi) .

道半ばで(親に)死なれた人でも必ず助けてくれる人はいる

物語

ムキワは幼児のころに両親が死んでしまい、おばあさんに育てられました。しかし、このお婆さん

は、一匹の山羊以外に資産を持っていませんでした。この山羊は毎日一本の瓶のミルクを出していました。ムキワは市場でミルクを売り、その金で食料や灯油などを買うことができました。

ある日、この山羊は全くミルクをだしませんでした。お婆さんはとても悲しみ嘆きました。そして神に食料が与えられるようお願いしました。お婆さんの子供の故チャンボにもお願いしました。家にはウガリ(東アフリカの主食、トウモロコシの粉を練ったもの)の粉とおかずの残りが残っているのみです。お婆さんと孫は明日の食べ物もありませんでした。

夕方、お婆さんは机に食事の用意をしました。ムキワは明かりを灯そうとしたとき、灯油(電気が通電していないため、ランプで明かりをとす)が一滴もないことに気付きました。悲痛な声で、ムキワは神に、「神様、助けてください。」とお願いしました。「私の孫よ、暗がりに行きなさい。神があなたを許す。」すると、商人たちがングオンギマの市場から来て、お婆さんに挨拶をしました。商人たちは2人が暗闇で食事をしているところを見て驚きました。彼らは、「どうして暗いところで食事をしているのか？悪霊と一緒に食事をしているのか？」とお婆さんに聞きました。「灯油がないのです。今日は山羊が一滴もミルクをだしてくれませんでした。」商人たちは、気の毒に思い、瓶一本の灯油と3日分の食料が買えるお金を与えました。

お婆さんは商人たちに感謝をし、孫に言いました。「道半ばで(親に)死なれた人でも必ず助けしてくれる人はいるというでしょ。見なさい、私たちは神に祝福されている。問題が起こっても、私たちに支援を与えてくれる親切な人びとを欠くことはない。」

<解説>

農耕民族であったボンデイ社会は、お互い助け合っている。例えば食事中、近くに誰かが通った場合、誰かが家を訪ねてきた場合、必ず食事に招く。どんなに食事の量が少なくても、必ず食事に招き、人との良好な関係を構築する習慣がある。そして、慈悲の心を持ち、弱い人への支援を絶やすことはない。かといって、それに頼っているわけでもない。常に神の存在があり、人々を見守ってくれていると信じている。

(4) Lago Halinhyiewi (Lago nkanyeewa) キャンプ場でのウンコは禁止

パルミラヤシが多くある町から少し離れた森には、象、バッファローなどたくさんの動物が棲んでいました。また、沢山の猟師も住んでいました。猟師たちは象の牙、動物の皮を販売して利益を得ていました。ただし、次の滞在に困らないように立派なキャンプを建てました。そこをラゴと呼びました。

乾季の時、狩人たちは、狩猟方法を学んでいるザウヤとともに狩猟に出かけました。猟師たちは狩猟の方法やタブーをザウヤに教えました。疲れると彼らはラゴキャンプに戻りました。

そのキャンプでは料理をしたり休んだりしていました。翌日彼らは狩猟にいつものように出かけました。一方ザウヤの態度は、猟師たちに好まれませんでした。なぜなら、ザウヤはキャンプの近くで用を足していたからです。

狩人のリーダーはキャンプの近くで彼が用を足しているところや、便がそのままになっていることに気づいていました。ザウヤは出かける直前に用を足していたのです。師匠はザウヤに「狩猟は今季

だけで終わらない。一年後またこのキャンプに我々は戻ってくる。君が汚したら、我々はどこに滞在するのか。この場所は住めなくなってしまう。だからキャンプをきれいにしなさい。」と言いました。ザウヤはこれを聞いて、悪い行為をやめました。仕事を終えたときや、特にその場を去るときには、その場がきれいになっているかどうか確認することが大切です。

<解説>

狩猟が盛んな場所では、移動がつきものです。ボンデイの人びともかつては狩猟をしていました。キャンプもしていたようです。その実態が物語になっています。その場を汚すと、次に来る際により気持ちにならず、社会も汚れてしまいます。実際、筆者が滞在する家庭でも、掃除は毎日行われており、現代社会で同じ行為が行われています。ボンデイ社会、タンザニアでは、女性が起きてすぐ行う家事は、家の掃き掃除です。まずは家をきれいにしてから一日が始まるのです。家がきれいであれば、人々の心も穏やかになります。家の中、周辺をきれいにするという行為が、実は社会を守っていく行為につながっているのです。

(5) Asahau Mtenda, Mtendwa has ahau (Kwajaa Mtenda, Mtendwa nkajaa)

やった者は忘れるが、やられたものは忘れない

<物語>

1匹の猟犬が森で豚を探している際、迷ってしまいました。犬は家に戻ろうと道を探していました。犬は森の中を歩き回ると、運よく住んでいるムタクジャ村に近いキトンゲ村に出ました。

若者アブディは、その犬を見ると友達を呼び、石を犬の体に投げつけました。若者たちは、犬の足を捕まえようとしていました。若者たちは犬をいじめて楽しんでいました。そして彼らは犬に怪我を負わせました。

数日後、アブディはムタクジャ村の村長あての手紙を届けることになりました。そこに着き、手紙を渡すと、キトンゲ村へ戻るため、その村を去りました。一方、アブディにいじめられた犬はアブディを忘れませんでした。アブディこそが犬を追い払い、足にけがを負わせた張本人であることを。犬がアブディを見つけると、攻撃しました。アブディは大声を出して逃げようとしていましたが、犬はアブディの足をひどく噛みつき、大けがをさせました。犬はアブディからやられた悪事を覚えていたのです。アブディは自分が犬にした暴力を忘れていました。一方犬は受けた暴力を忘れていませんでした。

私たちは忘れないが、悪行でも許さなければならないのです。

<解説>

人は、自分で犯した罪を忘れがちです。でも、された方は、心に傷が残り、忘れることはありません。しかし、復讐のために、やられた時と同じような行為をしてしまうと、また復讐が繰り返され、終わらなくなってしまう。たとえ忘れられない心の傷でも、相手を許す必要があります。許すことで、被害にあった方も前に進むことができるということです。

ボンデイ社会では、よく、「ムアチェ(ほっときなさい)」「シャウリ ヤケ(どうだろうと)彼の勝手だよ」といい、後に引きずらないよう問題を終わらせています。相手を気にしていると、それに引きずられて前に進めなくなってしまうからです。そして、ボンデイ社会では、本人に直接訴えるのではなく、こ

とわざや隠語を使用し、遠回りに相手に訴えます。これが近隣との問題などで関係悪化を避ける方法の一つです。

IV まとめ

これまで、ムゼー・チャンバイから聞いたことわざと、それを題材にしたお話を5つ紹介してきた。ボンデイのことわざシモから物語が展開し、分かりやすく道徳、人の気持ちを伝えようとしていることが伝わってくる。そして、物語からボンデイの暮らしも見えてくる。例えば、狩猟する動物の種類、生業、自然環境などが物語から把握できる。

他方、もし物語がなく、ことわざのみが提示された場合、解釈が相当難しい。各文化には培ってきた表現方法があるため、その土地の文化の知識がないと解釈ができないものである。共食、犬、キャンプ場などは、その場所の生業や宗教の知恵がないと解釈できないものである。

現在、ボンデイ語自体の使用が衰退し、物語の理解が難しくなることは予想されている。西洋教育が発達し、伝統文芸、口頭文芸に対して、同言語話者が興味を持たなくなり、さらには、民族語事態に興味を失ってしまうことは、ボンデイ社会に継承されてきた知恵の継続が存続できないという問題とつながる。ただ、近年、アフリカの農村にもスマートフォンが普及し、SNSが盛んになっている。そこでは、ボンデイ出身者および関係者が入れるコミュニティーが形成され、ボンデイ文化に対して盛り上がりを見せている。この現状が継続すれば、ボンデイ文化の継続も期待が持てる。この点については、今後も観察していく必要がある。

謝辞

2022年1月3日午後2時40分(タンザニア時間)、筆者のことわざの先生であるムゼー・チャンバイ氏が享年95歳で他界した。本稿はムゼー・チャンバイに教えていただいていた時間を思い出しながら執筆することができた。ムゼー・チャンバイには、心からご冥福をお祈りします。

参照文献

(日本語文献)

作者不明 1993『エリユトゥーラ海案内記』村川堅太郎訳註, 中公文庫.

高村美也子 (2006) 『スワヒリ語圏ボンデイ族のことわざに関する言語 人類学的研究』名古屋大学提出論文.

- (2013)『スワヒリ農村ボンデイ社会におけるココヤシ文化』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書第11, 名古屋大学文学研究科.
- (2021)「タンザニアの民族語・ボンデイ語のゆくえーボンデイの母語への意識変化」『スワヒリ&アフリカ研究』32, 大阪大学大学院言語文化研究科スワヒリ語専攻, pp55-66.

日野舜也 1998「スワヒリ文化の形成と拡大」『民族の世界史12: 黒人アフリカの歴史世界』川田順

造編,pp.250-273.

— 2007 『スワヒリ研究』 イスラーム圏アフリカ論集 I。

(外国語文献)

Abdul Sheriff (2002) “Slaves, spices & Ivory in Zanzibar”, *Eastern African Studies*, p25
Ministry of Education(1997), *Sera ya Utamaduni*.

Muzale R.T. Henry, Rugemalira M. Joseph, 2008, ‘Researching and Documenting the Languages of Tanzania’, *Language Documentation & Conservation* Vol.2, No.1,
University of Dar-es-Salaam, pp.68-108.

Whiteley, W. H. 1957 ‘The Changing Position of Swahili in East Africa’ *Africa: Journal of the International African Institute*, Vol.26. No.4. Edinburgh University Press, pp.343-353.

(インターネットサイト)

Bonde Kaya, <https://www.facebook.com/groups/319797554811524/about> 2021/4/1

Ethnologue “www.ethnologue.com” , (2019.10.24 閲覧)

Tamaduni za BONDE Tihamwe, <https://www.facebook.com/tihamwe> 2021/4/16 閲覧

Wabondei familia group (wfg), <https://www.facebook.com/groups/1705369726441740>
2021/4/1